

# 博士論文 和文要旨

論文題目	現代ポーランド語における対称詞使用：社会言語学的考察
氏名	川本夢子

## 研究の目的と対象

本論文の目的は、対称詞使用に関する現代ポーランド語話者の言語意識を記述することである。調査を通して、上記テーマに関する最新のデータ収集を行った。

調査対象は、ポーランドの政治体制が大きく変化した 1989 年以降の現代ポーランド語である。話し言葉に関する記述が主であるが、一部インターネット上でのやりとりに関する内容では書き言葉についても言及している。マスメディアを通じた情報伝達などは調査対象から外し、個人同士のやりとりに着目した。

## 仮説

本研究の仮説は以下に示す通り：

- 1) 1989 年以降、親称 (ty) の使用範囲が拡がり、言語レベルで表現される「礼儀」が簡素化された。
- 2) 現代ポーランド語に見られる変化（親称使用範囲の拡大および言語的「礼儀」表現の簡素化）について、一般的なポーランド語話者の捉え方はニュートラルで、特に否定的もしくは肯定的な意見を持っていない。
- 3) 年齢や地位、性別といった社会学的要素はあまり意味を持たなくなり、現代ポーランド語話者はこれらの要素を対称詞使用の判断基準としてあまり意識していない。
- 4) これまで敬称を用いていた相手に対し親称を用いるようになった（「親称への移行」が起こった）からとって、プライバシーの境界線を越えることが必ずしも許されるとは限らない。
- 5) 現代ポーランド人の対称詞使用に関する言語意識を記述することで、新しい観点からポーランド語のポライトネス・モデルを再定義することが可能となる。

## 研究課題

上に示した仮説を証明するため、以下の研究課題を設定した。研究課題はすべて、現代ポーランド語における親称使用範囲の拡大に関する内容である：

- 1) 親称の使用は何を意味するのか。
- 2) 「親称への移行」はどのような条件下で起こるのか。
- 3) 「親称への移行」は何を意味するのか。
- 4) 現代ポーランド語話者は、親称使用の範囲が拡大していることをどのように捉えているのか（肯定的もしくは否定的）。
- 5) 現代ポーランド語話者にとって最も重要な対称詞使用の判断基準は何か。

## 調査方法

本研究では、ポーランド語・ナショナル・コーパスのテキスト分析、アンケート調査、ビジネスアプリ LinkedIn のコメント分析、インタビュー調査の4つの調査を実施した。複数の研究分野に関わるテーマであることから、量的調査と質的調査、双方のデータ収集に努めた。上記の調査を組み合わせることで、対称詞使用における現代ポーランド語話者の言語意識について、より正確な全体像をつかむことが可能となった。

## 論文の構成

本論文は6章からなる。第1章は序論として、研究テーマ、目的と調査対象、仮説、研究課題をそれぞれ提示した。第2章はキーワードとなる語彙の本論文における定義を示し、続く第3章では先行研究を詳しく紹介している。第4章では本研究で行われた4つの調査の内容を詳しく述べ、調査の結果は次の第5章で研究課題に対する答えと共にまとめた。最終章は論文全体の総括として、今後の課題を提示している。以下、各章の内容について順に述べていく。

### 第1章：序論

研究テーマの選択意義、目的と調査対象を示し、仮説と研究課題もここで提示した。

### 第2章：語彙の定義

第2章では、ポライトネス、言語規範、言語意識、現代ポーランド語、言語の民主化、ビジネス言語、対称詞それぞれの語について、本論文における定義を定めている。辞書の定義に加え、ポーランド語研究者たちが独自にまとめた定義も考慮し記述した。

### 第3章：先行研究

ここではポーランドの対称詞使用に関する先行研究をまとめている。まず初めに、発話行為としての対称詞使用を議論する上で基盤となるポーランド語のポライトネス・モデルを示し、他言語との対照研究や外国語教育の分野における研究についても言及している。

第3章では、非常に充実した先行研究をもとに、ポーランド語の対称詞全体について記述を試みた。ポーランド語の対称詞は主に親称と敬称の2種類に分けることができるが、その中間に位置する対称詞として捉えられる表現や、必ずしも親称と敬称の使用が対称ではないこと、また歴史的要素が対称詞使用に与えた影響なども議論の要となる。

章のまとめとして、現代ポーランド語の対称詞使用における問題点を挙げている。多くのポーランド語研究者は、コミュニケーション場面における公私の境界線が明確でなくなったことを指摘している。ポーランドの伝統的なポライトネス・モデルをふまえると、公的な場面は敬称（pan, pani）の使用と、私的な場面は親称（ty）の使用とそれぞれ結びつくのに対し、今日のポーランド社会では、例えば本来敬称使用が求められるべき職場で親称を使用するポーランド語話者が増えたことで公私の境目がはっきりしなくなり、ゆえに対称詞使用の判断が困難となる状況も増えてきた。また、語用論の観点から問題とされる現象の一つに、親称と敬称が混在した対称詞の使用がある。例として、相手のファーストネームを敬称の pan/pani と結びつけた表現や、肩書を含む対称詞で敬称の pan/pani を省略した形などが挙げられ、これらは英語圏文化の影響だとする見方もある。一部の研究者は、現代ポーランド社会における親称使用の範囲拡大は言語の民主化・アメリカ化を反映する現象としても捉えている。現代ポーランド語におけるこのような変化はインターネットを用いたコミュニケーション形態も影響していると考えられ、年代差によってもまた、対称詞使用の言語意識に差が出るとされている。

### 第4章：調査内容とその結果

#### 1) ポーランド語・ナショナル・コーパスのテキスト分析

最初の調査として、ポーランド語・ナショナル・コーパスを用いたテキスト分析を行った。「親称（ty）で」を意味する2つのキーワード（na ty および per ty）でコーパス全体を検索し、表示されたテキストデータを分析した結果、親称を用いる関係性において話し手と聞き手を結びつける3つの重要なファクター（話者にとっての利益、楽しさ・自由さ、精神的距離感の近さ）があること示された。ポーランド語話

者は相手との関係性を築く上でこの3つを親称使用の判断基準にしていると考えられる。親称を用いる関係にあっても、プライバシーの境界線を越えることが必ずしも許されるとは限らず、特に話者が何かしらの利益を目的として親称を用いている（表向きに距離を縮めているだけ）の場合、親称の使用は精神的距離の変化とは結びつかない。本コーパス調査から、飲酒の場や他文化との接触といった要素もまた、親称使用に関する言語意識形成に関わることが示された。

## 2) アンケート調査

コーパスのテキスト分析に続く調査としてアンケートを実施し、430名から回答を得た。33の質問項目からなるアンケートを Ankieter.co.pl のウェブサイトで作成し、Facebook およびEメールを通して拡散した。アンケートは4つのセクションから構成され、最初のセクションでは年齢や性別、居住地、学歴、外国語の知識や海外生活経験の有無に関する回答者の基礎情報を質問項目とした。第2セクションでは家族、先生、初対面の子どもに対する対称詞使用に関する質問を設け、続く第3セクションでは「親称への移行」に関する項目、最後のセクションでは職場での対称詞使用に関する項目をそれぞれ設けた。アンケートの回答欄では選択式と自由記述式の両方を組み合わせ、量的・質的双方のデータ収集ができるようにした。

アンケートの回答結果から、現代ポーランド語話者が対称詞使用の際に最も意識している判断基準は、上下関係（年齢差や職場での地位によるもの）と場面の公私であることが分かった。その次に重要な基準としては、距離感、感情（大概の場合、怒りなど相手に対する否定的な感情）、性別や相手との関係性（親族関係、社会関係など）が挙げられる。また、上記の基準と合わせて意識される重要な要素として、「仲間」と「他者」というカテゴリーが存在することもわかった。発話者が相手を「仲間」として扱うか、「他者」として見るかは個々の判断によって異なるため、このカテゴリー意識が、特にビジネスの場で気まずさを生むと考えられる。

本調査では、社会集団ごとの言語意識にも差が見られることがわかった。高年層のポーランド語話者は親称の使用に対し若年層の話者よりも慎重である。しかしながら、若年層の話者も上下関係や場面の公私といった基準を意識していないというわけではない。男女の性別間においても差が見られ、男性の方がより親称の使用に対し寛容であることが明らかとなった。他の外国語との接触、特に英語との接触も対称詞選択の判断に影響を及ぼし、長く英語圏の文化と関わりがあるポーランド語話者は親称の使用をより寛容に受け入れる傾向にあるが、同時にポーランド社会におけるポライトネスの規範もきちんと認識し、それに沿った言語行動を取ろうとしていることも分かった。

アンケート結果からは、現代ポーランド語話者が大人同士のやりとりにおいて対称性を意識していることも分かった。非対称な関係は子どもと大人の間で観察され、例としては学校や家庭内での関係が挙げられる。

### 3) ビジネスアプリ LinkedIn のコメント分析

既述した 2 つの調査をふまえ、ビジネスアプリに寄せられた対称詞使用に関するコメント分析も行った。求職者と人事担当のやりとりにおける親称使用の可否について、ある投稿文に寄せられたアプリ利用者たちのコメント 203 件を分析した結果、仕事上のやりとりにおいても、上下関係と場面の公私が対称詞選択の重要な判断基準になることが明らかとなった。加えて、特に職場でのコミュニケーション場面においては「仲間」と「他者」のカテゴリーが言語意識に大きく影響していることも強調すべき点である。求職者を「他者」として認識する人事担当が一定数いる一方で、求職者をすでに「仲間」として捉えることで、相手が企業やチームの雰囲気合うかどうか判断しやすいと考える人事担当もいることが分かった。

本コメント分析からは、多くのアプリ利用者がポーランド語の対称詞使用に関する規範と、英語圏の対称詞使用に関する規範の違いを明確に認識していることもわかった。特にポーランド語におけるファーストネームの使用に関しては慎重になるべき点とするコメントが複数見られ、ポーランド社会においてファーストネームが意味する距離の近さを証明する結果となった。IT 業界では相手によらず親称の使用が好まれるとするコメントも見られたことから、この点については次の調査で詳しく扱うこととした。

### 4) インタビュー調査

本研究最後の調査として、10 名の参加者（女性 3 名、男性 7 名）を対象としたインタビュー調査を行った。参加者は全員 IT の専門家もしくは IT 関連の業務に携わる人物で、主に職場での対称詞使用について諮問に答えてもらった。インタビューは、予め設定した質問項目に答えつつ、参加者本人が追加で話したい内容がある場合は特に時間制限を設けず、話しを続けてもらう形式を取った。調査はボイスレコーダー及び Zoom を用いて実施・記録され、インタビュー終了後に Word で発話を書き起こし、分析した。

インタビュー調査参加者の回答から、職場で相手の立場に関係なくすべての人物に対し親称を用いることが、組織内で新しくルール化している傾向が読み取られた。重要なのは、職場で初めて会う話者の間で、どちらかが明確に「親称への移行」を提案することである。特に、採用面接の段階で組織内の対称詞使用に関するルールに言及することで、その後のコミュニケーションにおいて気まずさを軽減することができるといえる。

「仲間」と「他者」のカテゴリーが対称詞選択の判断基準となりうることは、先述のアンケート調査などからも明らかになった通りであるが、仕事に関わる場面では特にこのカテゴリーが重要な要素となることがインタビュー調査からわかった。誰を「仲間」と見るかの感覚は個人で異なるため、顧客や採用候補者を最初から「仲間」として捉えることはリスクが高いといえる。

ポーランド研究者たちが指摘している現代ポーランド語の対称詞使用における問題点として、英語の you とポーランド語の ty を全く同じものとし、用法の違いなどが軽視されている点が挙げられる。本調査の参加者たちからは、職場での親称使用範囲が広がっている理由のひとつとして英語の影響があるとの回答があったが、これは外国語のルールをそのままポーランド語に適用しようとするものではなく、職場で英語を用いる機会が増えたことによる自然な結果だという指摘があった。ビジネス市場のグローバル化に伴い、ひとつの会議中に複数の言語を用いる場面も多くなったため、円滑なコミュニケーションを目的としすべての言語において親称使用を統一させる過程で、ポーランド語でも親称の ty が対称詞のスタンダードとして認識されるようになったのである。

本インタビュー調査から、職場において場面の公私によって対称詞を使い分ける意識は、徐々に薄れてきていることも明らかとなったが、「他者」の存在を意識する場合には、普段親称で呼び合っている相手に対し、上下関係などに応じて敬称に移行する場面があることもわかった。この場合の敬称としては肩書の使用が例として挙げられるが、pan/pani の語を省略した形も見られる。

## 第5章：結論

先行研究の記述および本研究で行った全 4 調査の結果をふまえ、研究課題に対する答えは次のようにまとめることができる：

- 1) 親称の使用は何を意味するのか。

多くの場合、話者間に上下関係（年齢や地位の差）がなく平等であること、もしくはコミュニケーションの場面がプライベートな場面であることを意味する。親称の使用は「仲間」と「他者」のカテゴリーで捉えることもでき、相手に対し親称を用い「仲間」として扱うことで、話者双方がどちらも同じコミュニティに属することを意味する。この「仲間」意識と親称使用の結びつきは、特に職場でよく観察される。

- 2) 「親称への移行」はどのような条件下で起こるのか。

上下関係における平等な立場、もしくはコミュニケーションの場面が公的ではないことを、話者双方もしくはどちらかが認めたときに起こる。また、話者が

相手を「仲間」として捉え、「仲間」である人同士のグループに受け入れる際にも「親称への移行」が起こる。「親称への移行」を言葉で明確に提案する必要はないと考えるポーランド語話者も多いが、はっきりとその意思を伝えないことが原因で、対称詞の選択に話者が気まずさを感じることもある。上下関係（年齢や地位の差）がある場合、「親称への移行」は上の立場にある話者が提案するものとされる。男女間では、性別は特に意識されない傾向にあるが、中年～高年層のポーランド語話者の中には、「親称の移行」は女性から提案するものだという意識を持つ人もいる。

3) 「親称への移行」は何を意味するのか。

上下関係がなく、話者が平等な立場にあること、もしくはコミュニケーションの場面が公的ではないことを意味する。精神的距離が近くなることを意味するケースもあり、この場合、それまで「他者」であった相手を「仲間」として受け入れる現象としても捉えることができる。仕事における人間関係で「他者」を「仲間」として受け入れるモチベーションとしては、楽さの追求（コミュニケーションの簡略化・簡素化）や精神的繋がり（寛容さ・誠実さ）の強調意志が挙げられる。場合によって、「親称への移行」が話者にとって何かしらの利益を意味することもある。

4) 現代ポーランド語話者は、親称使用の範囲が拡大していることをどのように捉えているのか（肯定的もしくは否定的）。

現代のポーランド語社会において、「親称への移行」が早い段階（多くの場合初対面の段階）で起こり、親称使用の範囲拡大が速まっている傾向にあることが指摘されているが、ポーランド語話者たちはこの傾向をポジティブに捉えている。「親称への移行」があまりにも早い段階で起こってしまうことは、問題点として否定的に捉える立場もある。職場でも親称使用は肯定的に捉えられているが、親称を用いる関係では距離が近いため、仕事上の改善点や問題点などを指摘しづらいと感じる現代ポーランド語話者も一定数見られる。

5) 現代ポーランド語話者にとって最も重要な対称詞使用の判断基準は何か。

最も重要な判断基準は、上下関係（特に年齢差、場合によって地位の差）の有無である。場面の公私もまた、重要な判断基準となる。その次に意識されるのが、距離感、感情、性別や相手との関係性である。仕事における人間関係では「仲間」と「他者」のカテゴリーも重要視され、場合によってはこのカテゴリーが上下関係や場面の公私よりも判断基準として優先されることもある。

仮説の立証結果は、以下の通りである：

- 1) 1989 年以降、親称 (ty) の使用範囲が拡がり、言語レベルで表現される「礼儀」が簡素化された。→立証された
- 2) 現代ポーランド語に見られる変化（親称使用範囲の拡大および言語的「礼儀」表現の簡素化）について、一般的なポーランド語話者の捉え方はニュートラルで、特に否定的もしくは肯定的な意見を持っていない。→立証されなかった（肯定的な意見が多い）
- 3) 年齢や地位、性別といった社会学的要素はあまり意味を持たなくなり、現代ポーランド語話者はこれらの要素を対称詞使用の判断基準としてあまり意識していない。→立証されなかった（特に年齢や地位による上下関係は意識されている）
- 4) これまで敬称を用いていた相手に対し親称を用いるようになった（「親称への移行」が起こった）からといって、プライバシーの境界線を越えることが必ずしも許されるとは限らない。→立証された
- 5) 現代ポーランド人の対称詞使用に関する言語意識を記述することで、新しい観点からポーランド語のポライトネス・モデルを再定義することが可能となる。→立証された

#### おわりに

最終章では論文全体をまとめ、今後の課題を提示した。